

シュルレアリスムと心霊学の一接点 タンギーの不定形物体とエクトプラズムを巡って

長尾 天（早稲田大学大学院）

シュルレアリスムの画家イヴ・タンギー（Yves Tanguy 1900-1955）は、1927年のギャルリー・シュルレアリストにおける初個展の際、アンドレ・ブルトンと協力して精神医学の著作からタイトルを引用したと述べている。ジェニファー・ムンディによって、この時利用されたのがシャルル・リシェの『心霊学概論』（1922）であることが明らかにされた。リシェはフランスの生理学者だが、超常現象に関する研究を熱心に行った人物でもある。ムンディの論文では、タンギーのイメージとタイトルの関係性に考察の焦点が置かれている。このため『心霊学概論』に付された図版や、心霊学的な視覚イメージについては踏み込まれていない。本発表はこの点に関して考察を行う。

心霊学の視覚イメージの中でも、タンギーの描くイメージと最も親近性を示すのは、エクトプラズムと呼ばれる霊媒から放出される不定形の物体である。『心霊学概論』では、幾つかの写真や、リシェ自身のデッサンにエクトプラズムのイメージが見出される。タンギー作品では、たとえば《コンポジション》（1927）における白く細長い物体や、《無用な光の消灯》（1927）における手のような物体と細い線のイメージなどが、エクトプラズムを想起させる。また《無題（大女、梯子）》（1926）の女性は、エクトプラズム実験中の霊媒と結びつき、《左の堆肥、右の堇》（1926）の浮遊する顔は、エクトプラズムから生じた顔のイメージと類似している。

またタンギーのイメージとエクトプラズムの間には、こうした視覚的類似と共に、性質的類似が見出される。たとえば、エクトプラズムは「物質化現象」と呼ばれることから、本来、物理的実在であることを特徴としている一方、光に弱いため、写真撮影のフラッシュによって消滅してしまう。つまり、写真というイメージに変換されることで、実在としてのエクトプラズムは消失してしまうのである。この実在とイメージの矛盾した様相がエクトプラズムを特徴付ける。こうした性質は、タンギーの描くイメージにも当てはまる。タンギーの描くイメージも確固とした三次元的イリュージョンを伴いながらも、彫刻などとして実体化されることは殆どない。さらにこの性質は、両者が有する同一化不可能性というもう一つの特徴に結びつく。両者はイメージに留まることによって、他の何らかの要素と同一化されることを原理的に拒否する。エクトプラズムの正体が明かされることは決してなく、タンギーの不定形物体が「～である」と名指されることも決してない。

そして、エクトプラズムとタンギーのイメージの類似は、心霊学とシュルレアリスムの類似によって規定されているのではないか。心霊学は「未知」を敢えて保持することによって、それを希望として未来へ持ち越そうとする。一方で、アンドレ・ブルトンは、タンギーのイメージを「未だ解明されえぬ言語」として未来に差し向けるのである。